

〔書評〕

Ernest G. Griffin 編

Eugene O'Neill: A Collection of Criticism

—— O'Neill 評価の新展望 ——

近 田 小 一

編集者 Griffin は序文の中で劇作家 O'Neill の特質について次のように述べている。「彼は人間の運命について特に関心を抱いていた。その運命への関心は彼を直接の社会的、政治的なかかわりから引き離しているように見えたものである。しかし個人的な運命をこのように強調したことが逆説的に、批評家が次第に気付いてきているように、彼がその文化的な環境を自分の時代に先がけて理解してながめるようにさせたのである。……ここに収められたエッセイは主として批評上のすぐれた洞察によって選ばれたものではあるが、その当時の諸問題に対する O'Neill の関心をしばしば写し出している。」このことは編集者の意図と本書の性格をよく物語るものである。Griffin は現在 Toronto の York University の教授で O'Neill をはじめ、その他の現代作家についての論文を多く書いている。本書はそうした成果に基づくところが大きいようである。

ここには13篇のエッセイが収められている。これは既刊の Oscar Cargill (その他) 編の *O'Neill and His Plays* (1961) や Jordan Miller 編 *Playwright's Progress: O'Neill and the Critics* (1965) 等のコレクションに比べてコンパクトな選定である。最初の3篇は O'Neill その人と作品について

の総論にあてられ、残り10篇で一定のテーマの下にその主要な作品が製作年代順にとりあげられている。その中でも特に *Mourning Becomes Electra* (1931), *the Iceman Cometh* (1940) それに *Long Day's Journey into Night* (1940) の3作品はそれぞれ二人の評者によって違った角度から主な対象として考察されており、編集者の主眼点の在りかたを示している。これらのエッセイは冒頭の編集者自身による一篇“Eugene O'Neill: An Introduction to His Life and Career”を除いてすべて、これまでに書物又は雑誌に発表されたものであり、またほとんどが1960年代の中期以後に書かれて O'Neill 研究の発展に一石を投じて注目された業績である。

Peter Gillett は“O'Neill and the Racial Myths”で黒人が登場する6作品をとりあげ O'Neill の黒人描写の発展をながめている。その最終作品 *The Icemen Cometh* の中で一般白人と対等に列置して描かれる Joe Mott に作者のもっとも意義深い黒人考察の発展がみられるとする。しかし各作品での黒人のイメージを O'Neill 劇のテーマの発展に結びつけて評価するというより重要で困難な課題はすべて読者の洞察にゆだねられているように思われる。Roger Asselineau の“*Desire Under the Elms: A Phase of Eugene O'Neill's Philosophy*”はこのリアリズムの色濃いニューイングランドの農民劇の中に人間を圧倒する本能の力——O'Neill のいう“life-force”——の流れを考察し、この賛美の中に主人公たちの救い(“hopeless hope”)があるとみる。Otis Winchester の“Eugene O'Neill's *Strange Interlude* as a Transcript of America in the 1920's”は多角的な視点からこの作品を観察し、これが当時のアメリカ文化と社会の集中的な反映であるとしている。ここには“Lost Generation”の諸相、フロイド主義の潮流、英雄崇拜、商業主義や科学観の盲目的受容等の時代的特徴が凝集されているとみる。John H. Raleigh は“*Mourning Becomes Electra and A Touch of the Poet*”で両作品を時代的な背景や劇的構成について比較し、女性の役割が前者では

破壊——死——に導くものであり、後者では創造——生——に結びつくものであると説く。観察の重点を *Mourning Becomes Electra* に置き、主人公の死の妄念を浮き彫りにしている。Elder Olson の “Modern Drama and Tragedy: a View of *Mourning Becomes Electra*” はこの作品をギリシャ悲劇の脈絡の中でとらえる。O'Neill の “Psychological fate” は animal drive と等価のものであることが強調される。評者は *Mourning Becomes Electra* は悲劇ではないと断じるが現代における悲劇創造の可能性については論じていない。Travis Bogard の “*The Iceman Cometh*” はこの作品における O'Neill の作劇技法を解剖し、repetition のモチーフ——同種の対話のからまりや同じムードの反覆描写——を “essential lyricism” とたたえている。他方この見方については “劇的効果の相殺” とする Eric Bentley の否定的見解 (“*The Iceman Cometh*”, Jordan Miller 編の前掲書 pp. 129—130) を無視できないであろう。さらに Bogard は主役 Hickey の破滅が彼の妻によってもたらされる過程をながめ、O'Neill における人間の魂の死はすべて女性がひき起すことを指摘する。この論議はつづく Robert Andreach の “O'Neill's Women in *The Iceman Cometh*” に引き継がれる。ここでは登場人物の pipe-dream はすべて彼等の女性たちによって作り出されたことを観察し、女性の愛が男性を愛から憎悪にさらには自己破壊の世界に導き入れることを証明する。ここに明らかになる女性のイメージは the Virgin Mary に外ならない。しかし評者はこの the Virgin Mary が何故 negative な力であるのかという問題には踏み込んでいない。この考察は次の作品 *Long Day's Journey into Night* における Mary 像についての論議に任かされている。Timo Tiusanen は “Through the Fog into the Monologue: *Long Day's Journey into Night*” でこの O'Neill のもっとも重要な作品を “観る劇” の視点から分析している。登場者たちのすべてが “仮面” をつけて相対しており、その対話は事実上の Monologue であることを O'Neill の作劇技法をときほぐすことによって明らかにする。こうして O'Neill の人

物たち“fog people”の救いのない孤絶を読者の目にはっきりさせる。彼等の窮極的な実相を最終場面での Mary の狂気の登場に見ようとする Tiusanen の目は鋭い冴えを見せている。Egil Törnqvist の“Parallel Characters and Situations in *Long Day's Journey into Night*”は登場人物の性格や状況の描写に似通ったパターンがあることを観察しながら、その焦点を Mary (伝記的に O'Neill の母) に合わせていく。ここでとらえられる Mary は男性を愛することのできない girl woman 不毛の——イメージ——であり、Tyrone 一家(O'Neill 自身の家庭)の三人の男性を破綻させたのは母として妻としての役割を担うことのできない女性であったことを証明する。Törnqvist はこの作品の人物分析を通して O'Neill がその母によって如何に深い影響を受けたか——彼の個性形成ばかりでなくその女性観ひいては女性描写のあり方で——を明らかにする。Eric Bentley は“Eugene O'Neill's Pieta”で主として *A Moon of the Misbegotten* をとりあげながら、O'Neill の描き表わす女性たち——ここでは the Virgin Mother——がどうにもぎごちないのは彼自身の“fear of sex——fear of woman as woman, longing for her as mother or as virgin” (p. 138) にもとずくと指摘している。O'Neill の性格描写の有力な動機を彼の深層心理の中に洞察した卓見とすべきであろう。

O'Neill 劇の世界は彼の極めて個性的な人生観、宇宙観によって培われていることにここで注目しなければならない。O'Neill は彼の宿命観を次のように語っている。「わたくしには間違っていなければ宿命感がつきまわっている。それは天運 (Kismet) といおうか、否定的な運命でギリシャ的な意味のものではない。——時が経つにつれて、わたくしにはおかしなもの、茶番めいたものさえが、何らはっきりした理由もなしに突然くずれて暗い悲劇的なものになってしまうのはどういうことなのかと感じるのだ。」(*Time*, October 21, 1946. p. 76) さらに彼は現代のアメリカ文明について以下のようなきび

しい批判を投げかけている。「わたくしはアメリカは歴史上もっとも大きな失敗であると感じている。それは史上他のどの国よりもおおく何もかも与えられた。しかしわたくしたちは人間の魂の外部にある物を持つとすることによって魂そのものを濫費してしまったのだ。」(Time 同上部)

こうした悲劇的な感覚、暗い想念は彼の作品主題はもとよりその登場人物の描出にその劇的状況の描写にあまねく見出されるものである。この批評集では多くの執筆者が集中的に O'Neill の女性主人公に観察の目を注いだ。*Strange Interlude* で虚しい幸福の追求に自滅する Nina (Winchester), *Mourning Becomes Electra* で死の妄念につきまといられる Lavinia (Olson), *The Iceman Cometh* では破壊的な the Virgin Mary のイメージをになう女性群 (Andreach), *Long Day's Journey into Night* で救いのない “dope fiend” の孤絶の母 Mary (Tiusanen, Törnqvist), そして *A Moon of the Misbegotten* で “死児” を抱えるグロテスクな the Virgin Josie (Bentley)。ここに浮き彫りにされる女性のイメージはいずれも不毛で空しいとなみであり、破壊と死に結びつく存在である。これらの劇的表現は O'Neill の抱く宿命観と際立った符合をみせており、さらにはアメリカ作家として彼が示す現代文明への所信と深くかかわるものである。

この批評集は勿論 O'Neill 劇全体の諸相をすべて包み込むものではないし、彼の文化的な環境や時代的背景との関連を残らず論じ尽しているわけでもない。さらにその論議の中に若干疑問を感じる点もなくはない。例えば *Mourning Becomes Electra* の Lavinia の描写にフロイド色がうすいと見る見方 (Edwin Engel, “Ideas in the Plays of Eugene O'Neill” p. 31) や *Desire Under the Elms* の Ephraim Cabot の中に Eben や Abbie と同じく “life-force” が流れているという考察 (Asselineau, 前掲書 p. 63) 等は首肯し難いものである。しかしそれら部分的な難点は本書の価値を大きく損ず

るものではない。わたくしたちが O'Neill の内面的な世界とその劇作品とを一体として捉え、アメリカ作家としての歴史的文化的な評価を試みようとするとき、本書はすぐれて有益な示唆を提供するものといえるであろう。

末尾に付されている *Selected Bibliography* には O'Neill の劇作品の刊行リストや彼自身のコメント集のあとに、彼についての伝記類、批評書、評論等の資料がよく整理されて収められており、O'Neill の組織的な研究に便誼を与えている。

(New York, McGraw-Hill Paperbacks. 1976. \$2.45)

1976. 11. 20 完稿